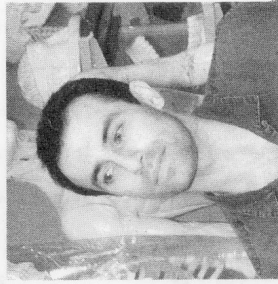


●賈 露茜 (カ・ルウシー)
中国上海生まれ。

上海第二医科大学歯学部卒業
後、同大学附属病院広慈病院
にて臨床歯科医師並びに講師
として勤務。1978年、来日。
翌年東京医科歯科大学口腔外
科教室入局(専攻生)。1989年、
東京医療専門学校(鍼灸専科)
卒業。1991年から上海鍼灸治
療院開業(東京・西大井)。



●トーマス・ブラゼイェヴィツ
(Thomas Blasiewicz) 独国生まれ。
1976年、ギムナジウム大学卒業
後は兵役の代わりに福祉に関する
活動を行う。1979年、来日。
1984年、花田学園卒業後4年間、
日産玉川病院に勤務(東洋医学研
究所主任・代田文彦氏)。その後、
翻訳業、往診。1993年からト
ーマス鍼灸院開業(神奈川・葉山)。



●エドワード・オバエイデー
(Edward Obaidey)
英国生まれ。
1983年、キンダグストン大学
(建築デザイン科) 卒業。
1986年、来日。1991年、マ指
京医療専門学校(鍼灸あえエドワ
ード鍼灸院開業(東京・三軒
茶屋)。

座談会

日本で活躍する外国人鍼灸師が語る

日本の鍼灸業界に感じること

本年九月にはニューヨークで第4回世界鍼灸学術大会が開催されるが、海外に進出してきている日本人鍼灸師も多く、個人レベルでの国際交流も盛んである。今回は海外から日本へ来て学校卒業後、鍼灸師として活躍しているドイツ、イギリス、中国の3人の外国人鍼灸師の方に来日のいきさつから苦学話などさまざまな思いを語ってもらった。(司会/本誌・馬場勉)

●鍼灸との出会い

【一】 日本に来るようになった経緯をまず、簡単にお聞かせください。

【賈露茜】 親戚がもともと日本にいて、うちの主人がそこで働くようになったものだから。それで主人に従って来ました。私は実は歯医者で、上海第二医科大学に二十五年間ずっと勤務しました。だけど、日本に来て、資格を認めてくれないでしょう。それが悔しくて。一日二日でもらえる経験じゃないから。だから漢方医学と鍼も二十年間やっていたから、せめて鍼でもやろうと。でも鍼も日本の資格がないとできない。

【一】 日本の学校に入らないとね。

【賈露茜】 仕方がないから三百万借りて、学校に入って、国家試験受けて。私は鍼で人の病を治してあげようと決めたの。だから、自慢じゃないけれども、二十何年間も患者さんと付き合った経験が鍼治療にプラスになるんじゃないかと思いますね。

【エドワード】 確かにそうね。僕の場合は前は空手を勉強していました。



【―】 それはイギリスですか。

【エドワード】 そう。やる事がなくて、空手の道に入って、空手をもうちょっと勉強するつもりで、日本にきたんですけどね。その帰りにスリランカに寄ってマラリアに罹った。最初は風邪かと思つて、ハードな練習して汗でもかければ治るかなと楽観的に思っていたけど、なかなか治らなくて、イギリスに戻つてからお医者さんに相談したんですよ。すると、マラリアと診断されて、血液検査、便検査、薬の服用を三カ月続けた。で、六カ月後くらい経つたある日、もう治りましたよと言われた。それでも毎日高熱が出て、ちょっと精神的にも肉体的にも苦しかった。しかしお医者さんは、うん、まあ一、二年間で大丈夫ですよと言うんです。それまでは西洋医学は何でも治せるかなと思つていたけど、それを聞いてもうがっかりした。ほんとに毎日、パツとすごい熱が出るんですよ。何とかならないかとお医者さんを責めたんですね。すると、これ以上何もできないですよと言われてね。

がっかりしている時、友達のお友達が鍼をやるというけど、試してみないかと言われてね。ただ、その時は顔が真っ青になつた。あんなものなんか絶対やらないと思つてね、いやだと一カ月ぐらひは断つていた。でも結局、中国鍼で治療を受けることにした。それは痛くてね。でも、すごく元気が出てくる感じがした。それまでは毎日だった高熱が、週に三回、二回、一回と徐々に減つていき、そして完全に消えたね。あの病気で、鍼灸が天職という感じがしたね。じゃあ日本に戻つて勉強しよう。

【―】 まさに運命的な出会いですね。

【エドワード】 病気はやつぱりそういう役割もあるね。それはものすごく感じた。そして日本に戻つて、学校に入って、ラツキーで卒業したんですよ。でも学費はすごく高い感じがした。

【トーマス】 国がもう少し援助してもいいと思うよ。

【賈露茜】 歯医者のとき一年間、田舎の巡回医療をした時、薬があまり手に入ら

ないので私と一緒にグループは何でも鍼で治療していた。正直いつて私は内心で笑っていた。何でも鍼で治っちゃうのかなと。でも実際に見て、効果があることに気づいた。それ以来私も興味を持ち始めた。例えば、激しい神経痛の患者さん。注射も全然効かなかったのに鍼をやつてみると、食事ができるようにまでなつた。それで私も鍼のことを研究して、いろんなことをやってきました。やつぱりきつかけつてあるんですね。

【―】 トーマスさんは日本に来る前から親日家と聞いていますが。

【トーマス】 日本には弓道をやりに来たけど、東洋の思想にはいっぱい興味があつたんですね、十何歳の頃から。特に弓、合気道など、日本の文化に非常に興味があつた。それだから日本に来たのね。日本へはシベリア鉄道に乗つてナホトカから船で横浜に着いた。そしたら横浜の関内にスタジオアムがあるんですね。東洋というのはそこら中がお寺だらけで、女の人みんな着物

を着て、という東洋の夢があったのに、一番最初に目に見えたのは、でかい野球スタジアム。友達が迎えに来てて、これは何ですかって聞いてしまった。がっかりしましたですね。

【―】 よくある話ですよ。

【トーマス】 こちらは日本の文化を見たいから、わざわざ世界の向こう側から来てるんですね。なのに日本の文化が見えないわけですね。何か非常に残念だと思ったんですね、日本の文化が消えて。例えば女性の服装の着物、住まい。私が探してるのは日本の古い田舎の家なんです。伝統的な日本の大工さんって、その昔は非常に独特の仕事をしてたわけですね。木で家をつくって、しかも地震の多い国なので、その柱の組み方が欧米に見られないような造り方なんですね。今、探してみても、どこにも一つもないんですね。中国は自分の伝統をもうちょっと大事にしてるんじゃないかという印象があります。自分のものはもうちょっと大事にしてほしいと日本人に対し

てクレームをつけたい。

●日本の学校教育に一言

【賈露茜】 中国では鍼灸学校、漢方医学学校など、全部国のものですね。もちろん授業料も安い。完全免除のところもあります。それを思うと日本の鍼灸学校の授業料は非常に高い。また、実習のやり方も違います。中国ではまず捻鍼法を教え、始めは段ボール箱のような紙を何層か折り畳んで四方にして、その上に施鍼します。その後かなり熟練し、把握したら、もちろん自分の体にも感覚ぐらい試してやりますが主に指導の先生が生徒を連れて病院又は診療所を見学をさせる。どんどん見させながら少しずつ指導の先生の下で患者の治療をしていく。そうすれば実際に治療経過、効果を自分の目で確かめることができます。日本でも昔はそういう指導方法だったと聞きました。現在看護学校では学生たちが筋肉や静脈注射などが人体模型で行われていると知り合いから聞きました。合理的だと思います。

【エドワード】 僕が一番感じてるのは、東洋医学を勉強したいのに、東洋の思想とか、哲学とか、診断方法ね、非常に少なかったことね。例えば脈診。実際臨床で抜きにできないのはやっぱり脈診ですね。それは僕の考えですけど。授業でも少しは話が出たけど、僕の場合は学校に行きながら、治療院で見学しながら脈診を勉強したんです。それは非常にラッキーですよ。そうでなければ僕は卒業して免許証を持っても実際は治療は難しい。いい先生もいっぱいだけど、先生たちの意識もやっぱりちょっと問題だったと思うんですね。

僕が先生だったらね、なんと言われても絶対東洋医学の診断方法をなんとか伝えますよ。どんな忙しいカリキュラムでも、時間をつくって、授業が終わってからでも、ちょっと十分ぐらいつつでも。その責任もある。せつかく東洋医学を勉強したいのね、西洋医学の知識をもつて治療すること、何か違和感があつてね。さつきトーマスさんの話したとおり、わざわざ地球の反

対側から来たわけだね、僕の場合はシベリア鉄道には乗らなかったけど、わざわざこっちに来てね、東洋の本当の姿はやっぱり消しちゃだめ。それはとにかく日本の教育に問題が少しあるね。

●外人鍼灸師はパンダみたいなもの

【トーマス】 私はその辺がちよつと立場と経験が違う。私は学校卒業して、玉川病院で四年間、最初の二年間は研修生で臨床をやったんですけども、そこで感じたのはお医者さんと鍼灸師の交流があまりないということ。で、私が交流を図ろうと計画を立てて、外科の先生、その病棟の主任と、東洋医学研究所の主任、婦長さんにいろんな許可を得て、じゃあこれからこういうことをしましょうよと、ちゃんと計画書を書いて出したわけね。もちろん院長先生の話も入ってますけども。それで二年間は毎日のように、外科病棟で、手術した患者さんをどんどん鍼治療してね。最初の計画は術後疼痛ですね。そのために毎日病棟の中を外科と内科を歩いて、夜の八時まで一生懸命治療してた。例えばお昼手術してる患者さんは、一時か三時に部屋に戻って来ますね。そうすると麻酔が覚めて、鍼を打った後、鍼が効いてるかどうかって夜の八時から九時ぐらいまで待たないといけないわけです。それを毎日やって、ばかみたいに働いたわけですけれども、それはもちろん看護婦さんも見てるし、先生も見てるし、こいつはよく頑張るねという感じでね。一年後には私がその病院を歩いていて、あいさつしない先生が誰一人もいなくなっちゃったよ。それが大きい進歩だった。

それに外人が鍼灸師としておもしろいつてことね。まあパンダみたいなものなんです。そのおもしろいということを私が利用したんです。「じゃあ先生、教えてくださいよ」と私が一人一人に声をかけたんです。耳鼻科だとか、心臓の外科だとか。そうやってほかの鍼灸師が体験できないことでも私はできた。産婦人科以外は全部。何回も見学しながらそこにいて、手術に立ち会ったり、特殊な検査は、ちよつと先生、

見せてくださいと頼んだ。でもほとんどお金は貰わなかったですよ。最終的にお金が足りないから、そこを辞めたんですけどね。

【エドワード】 それは残念だね。

【トーマス】 西洋医学と東洋医学ではお互いに教え合うことがたくさんあるんですね、ただ問題は簡単ではない。結局患者さんがほしいのは結果なんですよ。この患者さんに何が必要か。末期がんで疼痛がひどくて、それが麻薬でも効かないと、困ってる場合がいっぱいあるんですね。別に鍼で刺して、みんなきれいに治るわけでもないけれども何か助けられるかも知れない。

【エドワード】 僕の場合耳鼻咽喉科でもちよつと研究したね。毎日じゃないけど五年間ぐらいね。そして、そのときにいろんな感動があったよ。一つは匂いの感じない患者さんね。そう。何をやっても治らなかつたけど鍼灸で一応効果があったね。耳鼻咽喉科の先生もそう言ってた。それを思い出すと、やっぱり鍼灸はやり甲斐があるなという感じね。それと思い出すのはエドワ

ード鍼灸院を開業してから一週間目に近所の米屋さんのおばあちゃんが来たことかな。この患者さんがだめだったら。もう僕はアウトと感じてね。

【――】 初めての患者さんだったんですか。

【エドワード】 初めてじゃないけどね、とにかく特に重要な患者さんという感じだね。その米屋さんからはとにかくいろんな噂話が出るからね。それで汗をかきながら治療したんだけど、少しは良くなってね。それで患者さんはちょっと増えた。それはもう一週間で十年間に思えた。すごく疲れたね。でもああいうのも楽しかったよ。

もう一つ気づいたのはベッドが隣合わせた時の患者さん同士の反応ですね。お灸やっていると、先生、熱いと言うと、隣の患者さんがそんなに熱くないよ、もうちょっと頑張って大丈夫と言うんですよ。そしたらすごく治療の効果が広がるという感じがしますね。それは結構、僕びっくりしてね、最初は。特に外国人としてね、それは体験してみないと考えられないことですね。

【――】 今は一日にどのくらい患者さんを治療しているんですか。

【エドワード】 今ね、一日に十一人ぐらい。最近僕は外国人の間で人気になっています。(笑)

【――】 外人の鍼灸師だからといって、患者さんが驚いたことは？

【エドワード】 多分みんなはそういうふうに感じてるけど、逆だね。例えば治療してる間に日本人に言えないことも僕には言えるんです。パンダみたいなものだから、話やすい部分もあるんですね。それと鍼灸に来る患者さんは、病院、指圧と、ほかの療法をやってみて、それでも治らなかつたから最後の最後に鍼灸に来たという感じがありますからね。だから、もう言い訳はなしですよ。患者さんが来ない時は、とにかくまず自分自身を見直すね。ああ、やっぱりちょっとお灸が多すぎた、あれすればよかったとか、何回も何回も後悔したんですよ。それはやっぱり進歩しないとね。

でも害のない治療をやつて、それで患者

さんが何となくすつきりしてね、「ありがとうございます」というのは僕は大嫌い。せつかく東洋医学の勉強をするのならば、やっぱり医学として、みんなに認めてほしいからね。少しきつい言い方だけど鍼灸師自身の鍼灸に対しての意識が低いように思える。そしてもちろん患者さん側も低いんですね。

【賈露茜】 だから一部の人は卒業しても、全然別の仕事をやる。

【エドワード】 僕はとにかく借金を返さなくてはならないから、鍼灸をがんばらんと。

●治らないものは治らないと

【トーマス】 実際臨床に関わると、汚いとか、気持ちが悪いとか、実際にあるんですね、皮膚病とか。僕は玉川病院で働く前には血を見ることができなかつたですからね。

【エドワード】 失神しちゃうか。(笑)

【トーマス】 そう、失神して。病気は必ずしもきれいじゃないわけですね。ところが、本に書いてあるものは気持ち悪いもの

は何も書いてないんですよ。字だけでね。私みたいに血が見るのがだめだという人は、治療者になれないわけですね。それを克服するか、それとも手を引くかどちらかとね。その辺の妥協ができないんですよ。

「――」 それと、対人的に向かない人もいるかも知れませんね。

「トーマス」 ああ、それはいますね。それはさつきエドワードさんが言ったように、日本人に言えないことが外人は多少言えるんですね。治らないものは治らないと。でも普通は例えばリウマチとか糖尿病ということであれば、日本人の性格に合わせて、いや、これがちよつと難しいかも知れないけど……と、いろいろ言葉に飾り物を付けて、ぶつからないようにしとくわけですね。

「エドワード」 それで最後にやっぱりダメだったと。

「トーマス」 だけどそれは私の特別な考え方とかいうわけでなく治療者としての適切な判断力を持っていれば当然のことだと思います。鍼灸ですべきものではないと

いうことも当然あるしね。例えば骨折だったらこちらじゃない。整形に行つてらっしゃい。リウマチはやる場合もあるけれども治らないということを患者さんに了承してもらつてから、次の段階にいけばいいんですよ。いやあこれは大丈夫、大丈夫だよ、というのは無責任でしょう。

「賈露茜」 もちろん同意。

「トーマス」 私は長年日本にいて、半分以上ぐらい日本の文化が私の中に入つてしまつてるんですけども、ある程度やつぱり母国の文化を生かして、これはこういうふうに対応すべきだと真つすぐに言うんですね。でも患者さんの反応は、そんなに真つすぐ言うのはいやだと言つてもう来ないか、わかつた、治らないのなら、その中で何とかしてくれと言う人かの二通り。

それをお医者さんがときどきストレートに言つたりすると、ものすごくぶつきたらうになつちゃうんですね。そのとき、治らないけど技術の限界まで何でもやつてあげると。患者さんのためにこちらも尽

くしましよう、真つすぐ言いながら患者さんを思いやれるかどうか。そこが鍼灸師という職業の勝負のところでもある。鍼灸師は、治らないかも知れないけども何でもやつて一生懸命触つてあげよう。ああ、大丈夫、大丈夫と。赤ちゃんをだっこするみたいな感じでね。赤ちゃんが肺炎にかつて、どうしても死んでしまうことが避けられないとしても、少なくともだっこしたままで死んでしまうほうがいいわけですね。お医者さんが時間の面でそれはできない。しかし鍼灸師ならできる。お医者さんはどんなに頑張つてもできないんですよ。午前中だけで百人も診るとね。鍼灸師が将来的な職業の安定性のひとつがそこにあるんじゃないかと思います。

「賈露茜」 ある大きな病院で脳外科の先生が三叉神経痛の患者さんの手術をしたの。開いて、神経をカットしたのね。そしたらずつと麻痺して全然無表情の状態になつてしまったの。そこで私が鍼治療やりましようかつて申し出たら、その先生はふん、治

るもんかという感じで相手にしない。それでも五回ぐらい治療した後、少しよくなった。患者さんも喜んで。するとその先生の助手が電話をかけてきて、あの患者さんは、どういうところで、どういう鍼で治ったんですか、私に勉強させてくださいと。百パーセントとは言えないけど、現実的に治っちゃったから。

【エドワード】 これも難しいものですよ。ね。僕の鍼と、トーマスさんの鍼と、賈露茜さんの鍼は全然違うでしょう。個人差があるから、例えば僕の鍼では治らないかも知れない。でも賈露茜さんの鍼とかトーマスさんの鍼で治るかも知れない。

【賈露茜】 でも、とにかく鍼で治る可能性があるでしょう。でも、その先生たちは、先入観を持つている。

【トーマス】 一応何千年間もやってるんですから、効かない治療法だったら、そんなに何千年間ももたないはずだけね。何でも治るとは言わないけど、やってみる価値がある。

【賈露茜】 いや、もちろん鍼で何でも百パーセント治るとは言わないよ。治らないものはやっぱり治らない。ただたくさんのお医者さんは鍼に対して偏見がある。

【トーマス】 私は病院で外科の先生と何人か付き合ってたんだけど、外科の先生の立場がちょっと独特なんですね。外科の先生はこうやってメスを持つてるんですね。ブスって刺して、そこら中を切り開く。そうするとこんな細い鍼は効くわけないと思ってしまう。スケール感覚ですね。

【エドワード】 問題はとにかく行くところがない患者さんが最後の最後に来る。二十年間の病気で、何をやっても治らないということで、はい、鍼灸師の方どうぞ。それが一番頭にきてるの。例えばその治療をやりながら、ちょっと鍼をやると、もう副作用も少なくなるし、すごくいいですね。

ただ、鍼がどこまで効くかは、その患者さんの質というか、要するに病気の程度によつて決まる。今の場合はとにかく何をやっても効かないという患者さんは、その研

究の対象になつてるからね。

【賈露茜】 そうです。難しい病気はまず患者さんに手術を勧めて、手術がいやだなれば、じゃあ鍼をとすすめ、そういうケースも多いですね。

●白衣を着る必要がある？

【トーマス】 鍼灸師もほとんど白衣で仕事をしてるけど、白衣は患者さんとの間隔を非常に開けてしまうんですね。例えば小児ですね、子供の場合は何かわからない白いものが、壁もみんな白いし、こういうへんてこりんなライトがあつて、怖くなっちゃうんですね。最初から治療ができなくなっちゃうんです。別に普段着でも問題ないわけですね、毎日別物を着ればいいですから。だからもうちょっと普通の人間らしいような感覚でやつてもいいんじゃないかと思います。何でも白とか、何でも滅菌済みということじゃなくて。汚くしろとは言つてませんけども、ただ普通の人間みたいなのが好をしてね、やつてほしい。

【—】 それじゃあトーマスさんは白衣は

着てないんですか。

【トーマス】 そう、僕は着ない。僕は作務衣とかね、日本の服が好きなんです。作務衣はPRですよ。あの外人は変だねとなる。作務衣を何て言うか知らない日本人もいるですよ。しかし、和服を着なさいと私は言いたくない。それはただ自分の趣味なんです。和服か、普通の、別に誰が見ても文句が出ないような服でもいいんじゃないかと。必ずしも白衣着て、ステートを首にぶら下げて、この辺に鉛筆をいっぱい差しててさ。私がああいうのを見ると、かえって怖くなる。普通に気楽にがいいと思う。

【賈露茜】 でも病院側は何も文句言わなかったの。

【トーマス】 王川病院に働いていたときはちゃんと白衣を着てたんです。でも自分の治療室ではいつも普通の服で。ただそのときはネクタイの絞め方ができなかったもので、病棟を回る時ネクタイだけは外したんです。それでも文句がきたんですよ。白衣は患者さんのためでもないし、お医者さ

んのためでもないような気がするんですね。きれいな服でいると、汚れるとか、血がいつぱい付くとか、例えば手術のときいつぱい汚れるんですよ。それは話が別なんですけど、ただ鍼を刺すとか、ただ患者さんと話をするだけだつたら、別に普通の服でも、いいんじゃない。それを一番早く考えついているのは、小児科の先生のはずなんです。白い服を着ていて、首に訳のわからないやつをぶら下げて、これは子どもには化け物のように見えちゃうんです。子供はそれじゃあ通用しないですね。子供は真つ白なやつがやってて怖いと。それは何より先です。怖いと言ったその子供には、ほとんど治療ができないんです。

【賈露茜】 中国では小児科は全部、ピンクとか、模様の付いたのとか。恐怖心がないようにやってます。

【エドワード】 僕もやつぱり同じような感じがあつたけど、とにかく一応目立たないようにね、みんなと同じように白衣がいいと思うんですね。そうして着るならば、

一番ベストにあたるようなね。だからうちにはイツセイ・ミヤケのやつを買っただけだね。デザインがよくて、とにかく動きやすいという感じがあつたけどね。トーマスさんの考え方もわかるけど、特におじいさんとか、おばあさんが来るとね、前にに洗脳されてるかも知れないね、お医者さんでね。普通の格好だと、何だ、これと思っちゃう場合もあるね。特に鍼灸に来る患者さんはちよつと年上が多いから、僕の場合は残念ながら、特に夏になると暑くなるけどね、白衣は着てるね。あともう一つは、やつぱり白衣を着ると、とにかく特別な意識が起きてくるんですね。要するに仕事を始めるね。そして普段の軽い感じでいろいろやるんじゃないかってね、もう命かけてやるという気持ちもあるんですね。ただ、でもやつぱり洗濯は大変だね。僕はしないけどね。(笑)

【――】 話はまだまだ尽きそうにありませんがこの続きは今度の機会にしましょう。